

銭形平次捕物控

幽霊にされた女

野村胡堂

青空文庫

「親分、聞きなすつたか」

「何だ、騒々しい」

錢形平次の家へ飛込んで来た子分のガラツ八は、芥子玉絞りの手拭を鷲掴みに月代から鼻の頭へかけて滴る汗を拭いております。

「大変な事がありますぜ」

「また、清姫が安珍を追かけて、日高川で蛇になった——てな話だろう」

「冗談じゃねえ、今日のはもつとイキのいい話だ。何しろ、仏様のねえお葬いを出したのはお江戸開府以来だろうって評判ですぜ」

「何？ 仏様のねえ葬い、——どこにそんな事があつた」

平次もツイ乗出しました。日頃は話半分にししか聞かれないガラツ八ですが、今日持つて来たネタには、何かしら人の好奇心をそそる重大性がありそうです。

「近江屋の小町娘、——お雛が行方知れずになつた話はお聞きでしょう」

「それは聞いた。観音様へお詣りに行った帰り、供をしていた女中の眼の前で行方知れずになったという話だろう」

「それが、海河うみかわに落ちて死んだか、人手にかかったか、三日目から毎晩のように化けて出たつて言いますぜ」

「怪談話なんか聞いてやしねえ、馬鹿野郎」

「馬鹿野郎は情けねえな、それがみんな本当の話なんだから恐ろしい」

「それで、仏様のない葬いを出したつて筋だろう。紋切型の怪談じゃないか、江戸開府以来もねえものだ」

「ところがね親分、それがみんな幽霊の註文なんだつて言いますぜ」

「何？ 幽霊の註文、贅ぜいたく沢たくな亡もうじや者じやもあつたものじゃないか」

「葬いを出してくれなきやア浮うばれないから、私の持物のうちでも、日頃から大事にしてきたものや金目のものをみんな纏まとめて、身からだ体の代りに、小判で三百両棺かん桶おけの中へ入れて、祖先の墓の側に埋めて貰もらいたい——つて」

「八ッ、それは本当か」

「本当にも何にも、町内で知らねえのは錢形の親分ばかりさ」

「とんでもねえ野郎だ。俺の住んでいる町内で、そんな人を舐めた事をしやがって、ガラツ八、来い」

帯をキュツと締め直すと、白磨きの十手を手拭に包んで懐の奥へ、麻裏あさうらを突っかけて、パツと外へ飛出します。

「親分、どこへ行きなさるんだ。断つておくが、あつしのせいじゃないぜ」

平次の意気込みに驚いて、少しおどおどするのを、

「何をつまらねえ、誰も手前てめえのせいだなんて言やしねえ。その面つらはまた幽霊に向く人相じやないよ、浅草の化物屋敷で、大入道の役者を一人欲しいって言つて来たぜ」

「チエツ」

「怒るな八、近江屋へ真つ直ぐに案内しろ。親達に歎きをかけた上、大金までせしめようというの、いかにも憎い幽霊だ。三日経たない内に、きつと天道様てんとうさまの下で化けの皮を剥はいでやる」

「へエ、恐ろしい意気込みなんですな、親分」

「覚えておけ、俺はそんな細工をする化物は大嫌いなんだ」

まだその頃は、若くもあり、血の気も多かつた銭形の平次は、こう言つてその太い眉を

ひそめました。寛永から明暦、万治年間へかけて鳴らした捕物の名人、一名縮尻しくじりの平次は、水際立った良い男でもあったのです。

二

花川戸の質両替屋、近江屋治兵衛じへえは観音堂の屋根の見える限りでは、並ぶ者ないと言われる大分限だいぶんげん、女房お豊とよとの間に生れた一人娘のお雛は、江戸の町娘の美しさを一人で代表するのではないかと思うような素晴らしい容貌きりようでした。

あまり美しすぎると、親達の選り好みよが激しいので、十八の夏までも定まる婿がなく、贅を尽した振袖姿を、お供沢山に、街へ現しては、界限かいわいの冷飯食いの心魂しんこんを奪うという有様だったのです。

ある日、女中のお勢せいと一緒に、ツイ目と鼻の観音様へお詣りをして、伝法院でんぽういんの前まで来ると、お勢がほんのちよいと眼を外すうちに、お雛の姿が見えなくなってしまうのです。

大地へ吸い込まれたか、それとも仁王様の草鞋わらじに化けたか、それでも思わなければ、考

えようのない不思議な失踪しつそうに、お勢はしばらく呆氣あつけに取られてしまいました。——多分、他所見よそみをしているうちに、自分へからかつて、先へ帰つたのだらう——そんな暢氣のんきな心持で主人の家へ歸つて来ましたが、もとより先に歸つたわけではなく、お雛の姿は、それつきり、誰の目にも付かなかつたのです。

近江屋の騒ぎは大変なことになりました。出入りの頭かしらを総大将に、番頭小僧から出入りの商人、町内の若い者まで駆り集めて、観音様を中心に、界隈の路地裏からゴミ箱の中までも探し廻りましたが、どこへ消えてしまつたか影も形もありません。

あまり綺麗すぎて魔がさしたか、人買い人さらいといった類の悪者にしてやられたか、それとも、美しい虹のように蒸発してしまつたか、噂うわさは噂を生んで、際限もありません。

三日目——の夜でした。

店の大戸を下ろしてしまつてから、ホトホトと叩く者があるので、そこに居た小僧の兼かね吉ねきちが、何の気もなく臆病窓を開けてヒヨイと覗くと——、

ツイ軒の下の暗がりに、紛れもないお雛が、水に濡れたような姿でシヨンボリ立っていました。向う側の屋根の上にかかつた、青白い月に照されて、それがまた何とも言えない物凄さ。

「あッ、お嬢様」

あわてて潜りを開けて、店中の人が飛出しましたが、夏ながら凍るような月夜で、蟻ありこのも見えそうですが、兼吉が見たという、お雛の姿はそこにはありません。

「馬鹿ッ、夢でも見たんだろう」

大僧達おおぞうに叱られて、兼吉はベソを掻いてしまいました。

しかしちようど臆病窓の下、乾いた土の上が一尺四方ばかり、そこだけぐっしより濡れているのを見て、叱った大僧達も思わずハツとして顔を見合せました。

翌あくる夜の——丑刻やつ（二時）頃。

手水ちようずに起きた主人あるじの治兵衛が、フト昨夜の話を思い出して手洗い場の障子を開けて、丈夫に出来た格子から、月明りにすかして中庭を見やりました。期待するような、物なつかしいような、そのくせ恐ろしく齒の根も合わないような異様な心持で、右から左へ眼を移すと、——

灯籠とうろうの蔭から半分身体を出してこつちを差覗くようにシヨンボリ立っているのは、紛れもなく娘のお雛、青白い額ひたいぐち口から、少しばかり血をにじませて、白々としたものを引っかけた姿は、この世の者とも思われません。

「あつ、お雛じゃないか。お待ち」

横手の雨戸に飛付いて、大町人らしい嚴重な締りをガタガタ外し、一枚開けると、夢中になつて中庭へ飛出しましたが、そのとき眼に触れるものは、時代のついた石灯籠ばかり、お雛の姿は掻き消すように失せてしまいました。

「お雛がどうかしましたか」

女房のお豊も、寝巻姿のまま飛出して来ましたが、主人治兵衛が、庭石の上にドツカと腰を下ろして、狐につままれたような顔をしているのを見るだけ、傾く月影にすかしても、猫の子一匹隠れる場所があろうとも思われません。

三

「親分、こういうわけだ。親としては、これほどの歎きはない、死んだなら死んだでもいい、せめてその葬式とむらひだけでも出してやりたい、と思うのも無理はありません」

近江屋の主人治兵衛、ちようど折よく訪ねて行った、銭形の平次を奥へ招じ入れて、娘の行方不明になつた後あとさき前まへから、空からの葬式を出した経緯いきさつまで詳しく話しました。

「お察し申します。が、それは世間で言うように、やはりお嬢さんの幽霊の望みでなすつたのでしうか」

「とんでもない。娘はそれから二三度姿を見せましたが、一言も口を利くことはございませぬ。空葬式を出せと言つたのは、それ、伝法院の前にいつも出ているあの易者——」

「へエ——」

「観相院かんそういんとかいう髻ひげを生やした易者の勧めでしたよ」

「へエ——」

「あまり娘が可哀相で、死んだ者なら遺骸なきがらを探し出して、せめて葬式だけでも出してやりたいと、家内が頻りに言うので、観相院へ行つて易を立てて貰うと、——これはいけない、娘さんの遺骸は、海の沖へ流れてしまつたから、二度と再びこの世の人の目に触れることではない。そのためにあの世の苦患くげんは大変、娘さんを可哀相に思うなら、日頃大事にしていた品物と、三百両の小判を棺桶へ入れて、菩提所ぼだいじよへ葬つてやんなさい——とこう言います」

「で、その通りなすつたのでしうな」

「致し方がありません。私どもに何の考えもあるわけはなし、それくらいのことば娘の後

生が楽になれば、まことに安いものでございます」

治兵衛はこう言つて首垂れうなだました。見たところ四十前後、大家たいけの主人らしい落着きと品の中にも、何となく迷信深とくじつそうな、篤とくじつ実らしさも思わせませす。

「驚きなすつちやいけません、お嬢さんは生きていますよ」

「エッ」

唐だしぬけ突だな平次の言葉に、治兵衛はのけ反ぞらんばかり。

「お聞きでしょうが私は滅多なことで自分から飛出しません。お上の御用は勤めておりますが、人に縄を打つ商売の浅ましさを、つくづく知っているからでございます。ところが、自分の者の話や、世上の噂で、お宅のお嬢様の災難を聞いて、あまりの事にジツとしていられなくなつて、ツイ押付けがましくやつて来たようなわけでございます」

「……………」

「お嬢様は決して死んじやいません。それは立派かたに騙かたりでございますよ。あまりやり方が憎いので平常ふだんにもなく、私はやつて参りました。——口幅くちつたい事を言うようだが、三日経たないうちに、きつとお嬢様を探し出して上げましょう」

「本当でしょうか親分、——もし娘を助けて下さつたら、私はこの身上を半分差上げても

惜しくはありません。万に一つも生きているものなら、どうぞ助けてやって下さい」

大家の主人の貫禄を忘れて、治兵衛は畳の上へ手を落してしまいました。

「そんな事をなすつちや困ります。まアお手をあげて下さい。それに私は慾得ずくで飛出したわけじゃございません」

「それはもう、平常から親分の気性はよく存じております。家内にも聞かせて、喜ばしてやりましょう」

手を叩くと、転がるようにお豊。

「様子は隣室ととなりで聞いておりました。親分、本当に娘は生きておりましたようか」

三十六七の盛りを過ぎた女房姿ですが、昔はどんなに美しかったろうと思うお豊、少し取乱した様子で、平次の膝に縋すがり付かないばかりです。

「お疑いもあるようだ、こうなすつて下さい。伝法院の門前に居る易者が、そのまま店を張っているようなら私はこの事件から手を引きましょう。もしまた、易者の観相院が、二三日この方見えないうようなうようだったたら、何もかも騙りの仕業で、お嬢様の身の上には万に一つも間違いはありません」

こう言う平次の言葉には自信みが充ち満ちておりました。

四

小僧の兼吉かねきちを伝法院の門前まで走らせると、平次の予言した通り、易者の観相院は三日前から顔を見せないという話、近江屋夫婦も今さら呆気あつけに取られましたが、その代り、死んだと思つた娘のお雛が、あるいは生きているかも知れないという新しい望みが湧いたわけです。

「この上は見るまでもありますまいが念のためにお墓へ案内して下さい」

錢形の平次、近江屋治兵衛、それに番頭とびがしらが一人、鳶頭とびがしらが加わつて橋場の寺へ駆け付け、空からひつき柩こを葬つた墓を見ると、巧みに誤魔化ごまかしてはありますが、発掘した形跡は疑うべくもありません。

「御安心なさい。お嬢さんはきつと無事で還りましょう」

平次はこう慰めておいて、一たん自分のところへ引取りました。

後で、近江屋治兵衛、死んだと思つてあきらめていた娘が、たぶん無事に生きているだろうとなると、居ても立つてもいられない、恐ろしい焦躁しょうそうに悩まされます。

「いつそのこと、娘を返したら、大金をやるといふ高札でも出してみようか。慾にころんで空葬からとむらいまで出さしたくらいだから、金高次第では、娘を返す気になるかも知れない——」

物持の人の親らしい考えで、平次が止めるのも聴かず、役所の許しを得て、江戸の目抜きに、真新しい「尋ね人」の高札を建てさせました。

高札の文句や寸法にはおの自ずから型があります。「江戸、花川戸質両替渡世、近江屋治兵衛娘雛、当年十八歳、右尋ね当て無事親許に引渡されし方には、御礼として金一千両相違なく差上ぐべく候也」と書いて、あとは人相やら、手続きやらを細々こまこまと認めてあります。

江戸中は、しばらくこの噂で持ちつきり、三日経たないうちに、お雛が五六十人も現れそうな勢いでしたが、さて実際にそうは行かないものとみえて、治兵衛夫婦の気組みや予想を裏切つて、心当りを言つて出る者は一人もありません。

ことに弱つたのは、錢形の平次でした。三日と請合つた日は今日限りとなりましたが、どこへどう隠されたか、お雛の在処ありかを嗅ぎ出す手掛りも、その誘拐かどわかしの悪者の当ても付かないのです。

近江屋は質屋渡世で、ずいぶん客に泣かれもし商売の事では頑固なことも言いましたが、

近頃は身上が出来て、三文質は取りませんから、そんなにうら怨まれる筋の罪は作った覚えもありません。

治兵衛はまことに好人物の旦那、お豊は若い時は評判の美人だったと言いますが、ここへ嫁入りしてももう二十年にもなります、その上近い親類というものが無いのですから、財産争いする相手も見付からない有様です。

平次はすっかり持て余してしまいました。

「こいつはいけねえ。あんな綺麗な娘一人、どこへ隠しておいたってピカピカするから、三日と知れずにいるはずはないと思つたのは、俺の料りょうけん簡違いだ。さて、こうなりや始めからやり直しだぞ」

高々と腕こまぬを拱いて、朝つかから軒の釣つりし忍ぶと睨にらめつこをしております。

「親分、今日こんにちは」

言葉より先に、格子をガラリと、入つて来たガラツ八。

「ああガラツ八か、何か変つた事でもあるのかい」

平次は腕を解きましたが、上眼使いに妙に沈んだ調子です。

「親分でもねえ、何て不景気なんだろう、近江屋のはまだですかい」

「それが解りや手前てめえなんか何か変つた事——なんて訊きやしねえ」

「御挨拶だね、生あいにく憎變つた事と言つたら、気のきいた雌犬にも吠え付かれねえ」

「不景氣な野郎じゃねえか、相変らずお小遣がねえんだろう」

「凶星ツ、さすがに親分は眼が高え、そこを見込んで少し貸してもれえてエくらしいもの
だ」

「馬鹿、人が見たら笑うぜ、手なんか出して、ホラ、入いりよう用だけ持つて行くがいい——た
んとはねえよ」

平次は懐から財布を出して、投ほうり加減にガラツ八の方へ押しやりました。

「有難え、だから親分は感心さ。世間では言つてまずせ、錢形のは腕前といい、氣前とい
い、男つ振りといい、大したものだつて」

「取つて付けたようなお世辞を言うな」

「ヘツ、ヘツ、どうも今日はまんがよかつたよ、紅あかい結ゆいわた綿わたで足を縛つた鳥からすなんてものは、
滅多に見られる代しろもの物じゃねえ」

「何、何だとガラツ八、足を結綿で縛つた鳥だ、そんなものがどこにいたんだ」

平次の氣組みは、急に熱を帯びて、ガラツ八の腕——財布を拾つたばかりの二の腕をむ

んずと掴つかみました。

「何でもありませんよ、馬鹿馬鹿しい」

「いや、何でもなくはない、どこにそんな鳥がいた」

「驚いたな、どうも、先刻さつき子供達こどもが河岸がしつ縁つかまで捉つかえて、自身番みづかみへ持つて来ましたよ。緋鹿ひかの子この結綿むすめで足を縛くられて、その上櫛くを差し込んであるんだから、どんな鳥だつて飛びやしません。バタバタやつてるのをわけもなく捉つかえたが、鴨かもや雉きじと異ちがつて、真まつ黒くろな鳥とりじゃ、煮ゆて食くうわけにも行いかねえ」

「それは大変だ、来いガラツ八、その鳥に逢あつて訊ききてえことがある」

「冗談冗談でしょう」

平次は有無あやまを言いわせず、外とちへ引張ひり出でしました。昼下ひるがりの花川戸はながわどの往來わらいは、暑あつさにししばらく人足ひとあしも絶とえて、何なにとなくヒツソリしてあります。

五

子供達こどもの捉つかえた鳥とりは、そのまま自身番みづかみに縛くられて、四方あたりを物好ものきそうなのが、ワイワイ

取巻いておりました。

「どれだ、その結綿と櫛てえのは？」

「親分、お出なさい、これがその二た品ですよ。妙な悪戯いたずらをする人間もあつたものじゃございせんか」

番太の爺おやしが出したのは、燃えるような緋鹿の子の結綿と、鼈べっこう甲の櫛が一つ。

「ちよいと借りてえが、いいだろうね」

「え、え、どうぞ御自由に」

平次はこの二た品を内懐に入れると、鳥には眼もくれず、そのまま近江屋に飛んで行き
ました。

主人の治兵衛に逢つて、

「この結綿と櫛に見覚えはありませんか」と言うのと、

「あッ、これは娘の頭に着けていたものでございます。どこから見付かりました、これが
あるくらいなら娘の在処ありかもわかつたでしょう。これお豊、お豊、ちよいと来てお礼を申し
上げな、親分は娘を見付けて下すつたよ」

夢中になつて騒ぎ立てる主人を押えるように、

「待つて下さい、まだお嬢さんを見付けたわけじゃありません、漸ようやく手掛りが手に入った
だけですよ」

平次は這ほうほう々の体で外へ飛出しました。

「こいつは弱つた。さて、これからどうしたものだろう」

ブラリと歸つて来ると、後おくれ馳ませに追おい付いたガラツ八。

「親分、当りは付きましたか」

ぬつと横合から拙ますい顔を出します。

「いや、まるで解らねえ」

「へエ——」

「ところでガラツ八」

「へエ——」

「鳥というものは、飼かい鳥ではないな」

「そりゃア言うまでもありません。東とうてんこう天紅ともホオホケキヨーとも鳴く鳥はねえ」

「黙もくつて聴きけ」

「へエ——」

「どこの鳥屋にも、鳥がいた例ためしはあるまい。堂宮にも鳥は飼ってねえな」

「へエ——」

「何とか言えよ」

「黙って聴け——って言ったじゃありませんか」

「融通のきかねえ野郎だな——、ところでお前は、鳥のいた場所を知ってるか」

「知ってますとも、奥山にも上野の森にも、向むこう島じまにも——」

「馬鹿ツ」

平次は黙々として歩き続けました。

「あるよ、親分」

不意にガラツ八。

「あツ、吃びっくり驚びした、何があるんだ」

「忘れちゃいけねえ、鳥を飼っている家」

「何、何だと、鳥を飼っている家がある？ どこだ、サア言え」

「言いますよ言いますよ、胸倉を掴まなくなつていい」

「娘一人の命が危ねえんだ。手前の咽喉のどほとけ仏などを可愛がつていられるか」

「驚いたな、どうも」

「手前は話に無駄が多くていけねえ、鳥を飼っている家てえのはどこだ」

「奥山に近頃出来た化物屋敷ですよ」

「何？」

「土左衛門の臟腑ぞうぶを鳥がついばむところがあるんだ。土左衛門は人形だが、鳥は真物ほんもので、種を聞くと、桶へ入れて菰こもの間に隠しておく、鱒とじょうをついばむんだってね、そりや凄こわいぜ親分」

「本当か、それは」

「本当も嘘もねえ、鳥があんまり鱒を食い過ぎるんで、五六羽飼って取代え引代え出すつて言いますぜ、——だからたまにはあんなインチキな見世物も見ておくものだね、親分」

「ガラツ八、それでわかった。礼を言うぞ」

「どう致しまして、ヘツヘツ」

ガラツ八は、生れて始めて親分に礼を言われたのです。

「二人だと人目につく、手前は帰って、素直に待つてろ」

「へエ——」

「何にも人に言うな」

平次は裾すそを取ると、七三にからげて、奥山へ、まっしぐら 地に飛びました。

六

浅草の奥山は、その頃たんぼ田圃続き、雷門前の賑わいと比べては、表と裏にしても、あまりに違いすぎる風物でした。

そこへ、春から小屋を掛けて、広々と建て廻したのは、いつの世にもくり返される見世物の「化物屋敷」。場所が淋しいのと、足場が存外いいので、夏の始めから江戸中の人気を呼んでおりました。

ずっと下つて天保年間、東両国に小屋を出した目吉めきちの化物屋敷と、変死人見世物は、年代記物になるほどの人気を呼びましたが、奥山の化物屋敷は、それよりずっと前で、興行元とどろきごんぎは轟の権三、四十そこそこの浪人者上がり、額の左口に物凄い瘡痕きずあとのある、その仲間では顔の利いた男でした。

中は人形と張子と真物ほんものの人間とを、巧みにあしらって、細工も思い付きも念の入ったもの。木戸銭を払って、存分におどかさされて、ハアハア言いながら喜んだのは、当時の江戸っ子の物好きなどころでしよう。

平次がそこへ着いたのは、ちようど人の出盛りを越した申刻まなつ(四時)下がり、交通の不便な時代の客で、もうボツボツ帰り支度をする者の多い時分でした。

泥絵の大看板をくぐって、二十四文もんの木戸を払って入ると、中は俄然として別世界になります。

入口を一パイに飾ったのは、遠見を使った相馬そうまの古御所、人形をあしらって、これは通り一ぺんの出来ですが、細い道を辿たどって、奥へ踏み込むと驚きました。

最初に出て来たのは一つ目小僧、フラリフラリと提ちやうちん灯を下げてすれ違うと、頭の上から野衾のぶすまがバサリと顔を撫でます。薄暗がりから、ろくろっ首がニヨロニヨロと飛出すと思うと、横町からは見越しの入道が睨にらんでいるという拵こしらえ、——そんなものは別に驚きませんが、所々ジメジメした足元に、大蝦蟇おわがまが飛出したり、蛇の尻尾が額を撫でたりするのは、虫嫌いの平次には少し閉口しました。

折々は、キャツキャツと言う騒ぎ、物好きに入った女達が、あまり道具立が凄おびいのに怯

えて、引返しもならず、悲鳴をあげるのでしょうか。

攻め道具沢山な道をしばらく辿ると、パツと明るくなつて、噂に聞いた水死人の人形があります。葦の繁つた大川尻の風物をなぞらえて、そこへ水ぶくれになつた女の土左衛門が横たわり、時々鳥が飛んで来ては、臍腑をついばむという趣向です。ガラツ八に種を聞いて、わかり切つたつもりですが、さすがにこの道具立の巧いにはギョツとしました。

次の部屋は一面の蘭塔婆、舞台をぐつと薄暗くして、柳の自然木の下、白張の提灯の前に、メラメラと焼酎火が燃えると、塔婆の蔭から、髪ふり乱して、型のごとき鼠色の単衣を着た若い女が、両手を胸に重ねてス——ツとせり出します。

たつたこれだけの事で、まことに平凡な趣向ですが、幽霊になる女の恰好が良いためか、その白粉に薄墨を交せて塗つた、顔のつくりがうまいためか、身の毛もよだつような物凄さ。

やがて女は、徐かに前に進んで、釣瓶にすがつて、斜めに井戸を覗きます。怨めしやとも何とも言いませんが、凄さが身に溢れて、立ち止つた見物は一様に水をかけられたような心持になるのです。

その時はもう幾人も見物が入っていません。平次は青竹の手摺を越えて、一步幽霊の方へ近づきました。どうかしたら、これがお雛ではないかという疑いが、平次をすっかり亢こ奮うふんさしてしまつたのです。

二三人の見物の客は、平次の態度に驚いて、逃げ腰にこの様子を見詰めております。と見ると、幽霊は不意に、陥おとし穴あなに落ち込む人のように、あツと思う間もなく大地にめり込んで、あとは、塔婆と白張と井戸と柳が、ほの暗い中に残るばかり。

平次は呆然として青竹の手摺に還りました。もうそこには、一人も見物は居ません。

次の部屋は、打つて変つて明るく、緋毛氈ひもうせんの腰掛を据えて「お茶を差上げます」と書いた柱掛けなどが下がっております。

ホツとした心持になつた平次、思わず四方を見廻したが、夕暮近いせいか、それとも先刻の自分の態度に驚いて敬遠したか、そこには人の姿もありません。腰を下ろして我にもあらず腕を組むと、

「お茶を召しませ」

可愛らしいお稚児ちご、紫の大振袖、精巧はかまの袴、稚児輪うづむを俯向けてソツとお茶をすすめていたのでした。

「有難う」

茶碗を取上げて、と、顔を上げたお稚児と顔を合せて驚きました。
三つ目小僧です。

しかし、その三つ目の眼は、額の上へ絵の具で描いたのだとわかると、平次はかえってほほ笑ましい心持になって、もう一度お稚児の顔を見直しました。

眼が三つあるという外には、眼鼻立も尋常、たぶん女の児でしょう——まことに可愛らしい顔立ちです。

「フ、フ、お前はとんだ可愛らしいお化けだな」

と言う平次の眼を迎えて、お稚児の小さい指は、左に持った塗盆の上に動きます。

「何、何？」

まぎ
正しく仮名文字。

——ぜにがたのおやぶん、たすけてください——こんや、らんとうばで、おめにかかり
ましよう、ひな——

「……………」

平次は言葉もなく眼を見張りました。この三つ目小僧は十二三がせいぜいというところ、

お雛にしては若過ぎますから、多分お雛に頼まれてこんな事を書くのでしよう。

「……………」

平次は黙つてうなずきました。力強く、二度も三度も――。

金龍山の鐘が、ちようど六つを撞いて、木戸を締めるらしい、鈴の音が遙かの方からリン、リンと響きます。

七

その夜、銭形の平次はどこをどうもぐり込んだか、化物屋敷の中の、蘭塔場の舞台のすぐ前に潜んでおりました。

よつ 亥刻（十時）、子刻（十二時）――と次第に更けて行くと、薄暗がりの見越しの入道
もおがま も大蝦蟇も、ニヨキニヨキと動き出しそうで、拵え物と知っていながらも、その不気味さ
というものはありません。

天井に張つた、幕やら葎簾よしずやらを通して、ほんのり月の光が射し込んで、白張も、柳も塔婆も、かなりはつきり見えます。一つは、平次の眼が、この薄暗がりに馴れたせいもあ

るでしょう。

やがて丑満やつ（二時）頃。

柳の下に何やら動くものがあります。と見ると、それはユラユラと背が延びて、たちま忽ち一人の娘——夜目にも匂うばかりの美しい娘姿になるのです。

「お、お雛さん」

平次は同じ町内に住んで、この娘の顔は眼をつぶっていても思い出せるほどよく知っております。

髪こそ解き下げておりますが、素顔の色も白々と、しゅうしよく秋色を縫い出したらしい単衣ひとえ、赤い帯さえ夜目にも可憐です。

「シ、静かに、錢形の親分、お見かけしてお願い申します、どうぞ私を」
「シッ」

今度は平次が手を振りました。誰やら近づく気配。

「お雛さん、こうしている時ではない、さア逃げましょう」

青竹の手摺の中へ、手を延べようとすると、

「泥棒ッ、泥棒ッ」

「泥棒が入ったぞ、打ち殺せッ」

得物を持った五六人の若い者、平次を目がけてサツと殺到しました。

「エッ、邪魔立てするな」

相手の人数を測り兼ねて、十手は出しません。一人二人取って投げて、お雛をさらって逃げようとすると、いけません。

「あれエ」

蘭塔場の中へ潜んでいたらしい別働隊の二三人、バツタのごとく飛出すと、

「え、しぶとい女だ、今度は命がねえぞ」

二三人折重なって、そのまま大地へめり込むように、お雛も一緒に消えてなくなりました。

こうなつては、荒れたところで仕様がありません。

平次は向つて来る一人の大男を突き飛ばすと、身をかわして道具裏の闇へ。

「それ、逃がすな」

一団になって襲いかかるのをやり返して、どこともなく消えてしまいました。

八

化物屋敷は、その翌る日も、事もなげに木戸を開けました。幸か不幸かその日は物日、ものび客は朝から突っかけて、狭い化物小路は身動きもならぬ有様です。

正申刻しようななつ、道具大仕掛の特別な見世物があるという噂は、どこからともなく客の間に伝わって、昼頃から入った客は、もう動こうともしません。小屋の中はハチ切れるばかり。

「蘭塔場へ出る幽霊が出ねえのはどうしたわけだ」

「今日は特別の大仕掛な見世物があるって言うぜ、多分そこで見せるんだろう」

といった囁きは、口から耳へ、耳から口へと伝わって、蘭塔場から、見越しの入道の張抜きを飾ったあたりは、塩辛くなるような混雑です。

やがて申刻少し前ななつ、この化物屋敷の興行元とどろきごんぎ、轟の権三は黒羽二重の紋付に、長いのを一本落して、蘭塔場の舞台にツイと出ました。元は武家出というだけに、こんな装なりが身に付いて、額の古瘡ふるきずも何となく凄味があります。

「今日は特別な見世物を御覧に入れる。一度あつて二度とない見物みもの、こんな日に入り当たお客様は仕合せだ、サア、いいか」

口上とも独り言ともつかぬ事を言つて、サツと左の手を挙げると、

井戸の中からキリキリとせり上げられたのは一人の女。

それが何と、髪振り乱して、鼠色の着付を引摺つた幽霊でもあることか、水々しい島しまだ田まげ鬚まげに、薄化粧までした、十七八の美しい娘。しかも水色の単衣ひとえに赤い帯まで締めて、

その上を荒縄でキリキリと縛り上げられているのです。

娘は井戸の上へ、釣瓶つるべのように引上げられて、ちようど権三の眼の前、井桁いげたの上に横たえられました。

「ね、お客様方、仔細あつて、私はこの娘を殺さにやらねえ——とまあ考えておくんなさい。刀には種も仕掛もねえ、井戸の上で肴さかなのようにこの娘を切りさいなむんだ。こいつはお客様方の前だが、全く面白い見世物だぜ。一度あつて二度ねえとは、この事だ」

権三の言葉には、恐ろしい真実性が籠こもつて、グイグイと人の心に食い入りますが、まさか本当とは思わない客は、腹の底から脅かされながらも、固唾かたずを吞んで、口をきく者もありません。

「切りさいなんでしまえば、娘は死ぬ。へッ、へッ、へッ、へッ、死んだ後で化けて出ようと出まいと、それは勝手だ、へッへッへッ」

悪魔の笑い——権三の頬に残酷な翳かげがサツと遮つて、見物を総毛立たせませんが、当の娘は眼をつぶつて、口を利こうともしません。

「さア、よいか女、言い残すことはないか、諸人の前に死恥をさらすのも、お前の母親の心からだ、俺を怨むなよ」

「あツ待つて……」

娘はパツチリ眼を開けました。色の褪あせた唇は、何やらわななきますが、それつきり言葉にもならず、美しい眉がひそんで、彫きざんだような頬を、痛ましい瘡けいれんが走ります。

「ハツハツハツ、やはり命が惜しいか、可哀相に」

一刀、キラリと娘の胸へ。

と思うと、間髪を容いれず、

「エ——ツ」

と飛んだ一枚の錢。権三の手首を打つて、ハタと井桁に鳴ります。

「あツ」

思わず刀の手を下げると、続いてもう一枚。

「エ——ツ」

今度は権三の額、古瘡ふるきずのあたりを発止はつしと打ちました。言うまでもなく銭形の平次得意の投げ銭です。

「あッ」

たらたらと流れる血潮。

「轟権三、御用だぞッ」

張子の見越しの入道を引っくり返すと、その中から飛出した平次、呆気あつけに取られた群衆の肩を踏んで、パツと青竹の手摺を飛越すと、

「御用ッ」

「神妙にしろ」

続いて群衆の中から、ガラツ八を始め四五人の子分、バラバラと蘭塔場に殺到して、権三を取り巻きました。

*

お雛は無事に救われました。

轟の権三は、お豊の昔の恋人で、不行跡で愛想を尽かされ、お豊は間もなく金持の治兵衛の許に嫁入ったのを怨んで、二十年後にたった一人の娘のお雛を誘拐して、お豊夫婦に死ぬよりも苦しい思いを嘗めさせたのでした。千両の金にも目をくれずに、ジツと折を待ったのは、その蝮まむしのような恐ろしい怨みを、適当に晴らす時機を待たためだったのです。

それが、錢形の平次が入り込んだのを見て、破綻はたんの近いことを覚さとり、三つ目小僧に言い含めて平次をおびき寄せ、お雛と一緒に殺すつもりでしたが、平次に張子の大入道に隠れられて果さず、翌日、捨鉢になつて蘭塔場の井戸でお雛を切り、それを多勢に見物させて、せめてもの溜飲りゆういんを下げようとしたのでした。

易者の観相院は権三の手で、烏の足を結綿で縛つて放つたのはお雛、これで何もかもわかつたわけです。

与力よりきの笹野新三郎は、

「平次、今度は縮尻しくじりをやらなかつたじゃないか」

と言うと、

「へエ、あの権三ばかりは、助けようがありません。憎い奴でございます」

平次は朗らかに答えながらも、人一人獄門に上げる不快さに、その秀麗な眉ひその顰ひそむのを

どうすることも出来ませんでした。

青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物控（五）金の鯉」嶋中文庫、嶋中書店

2004（平成16）年9月20日第1刷発行

底本の親本：「銭形平次捕物百話 第四卷」中央公論社

1939（昭和14）年

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1931（昭和6）年8月号

入力：山口瑠美

校正：noriko saito

2016年9月9日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

幽霊にされた女

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>